処女降誕（Virgin Birth）

「聖なる処女」はイシュタル、アシュラ、またはアプロディーテーに仕える娼婦-巫女の添え名であった。この添え名は文字通りの処女を表しているのではなく、単に「未婚」の意であった。このような「聖なる処女」の務めは、性崇拝によって太母の恩恵を分かち与えること、病を癒すこと、予言すること、聖なる踊りを踊ること、死者のために涕泣すること、「神の花嫁」になることなどであった。

こういう神殿つきの女たちから生まれた子どもを、セム族は bathur、ギリシア人は parthenioi と呼んだが、ともに「処女から生まれた」という意味であった。『原福音書』によれば、聖母マリアは神殿娼婦 kadesha*のひとりであり、「神の父たち」として知られる僧侶階級のひとりと結婚したのであろう。

神殿娼婦

神殿に仕える娼婦たちは、ローマでは virgines または venerii、ギリシアでは horae、バビロン、カナアン、パレスティナではそれぞれ kadishtu、quadesh、と呼ばれた。

（「 Barbaroi! 」より）